



Title	日本語とフランス語の談話構成原理
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	フランス語学研究. 2012, 46, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57823">https://hdl.handle.net/11094/57823</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 日本語とフランス語の談話構成原理 Le principe d'organisation discursive en français et en japonais

井元秀剛 (IMOTO Hidetake)

La description des systèmes temporels proposée par CUTRER (1994) dans le cadre de la théorie des Espaces Mentaux est caractéristique par le fait que les valeurs des temps verbaux sont représentées par la configuration des quatre espaces primitifs (BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT) et que cette configuration est régie par ce que CUTRER appelle “principe d’organisation discursive”. Pourtant, le principe de CUTRER est limité aux langues anglaise et française, et ne s’applique pas au japonais. Dans cet article, en modifiant le principe d’organisation discursive, nous montrerons la différence configurationnelle des systèmes temporels entre le japonais et le français : la plus grande différence vient du fait que la position du BASE, toujours point de départ en français, n’est pas fixée morphologiquement en japonais.

キーワード：メンタルスペース理論 (théorie des Espaces Mentaux), 談話構成原理 (principe d’organisation discursive)

## 1. はじめに

CUTRER (1994) に始まるメンタルスペース理論による時制論は、各言語の時制形態素の働きを汎用的な基準で記述し、その働きの違いを理論的に提示できる可能性を持つ、すぐれた対照言語学的な装置である。その特徴は、時制を談話の流れの中でとらえ、談話構成原理を提案し、時制を4つの基本スペースの移り変わりとして規定したことにある。ただし、その談話構成原理は英語やフランス語を観察して得られた極めて限定的なものであって、日本語などを含めた汎用的な規定にはなっていない。筆者は井元 (2010a) において、談話構成原理を一部修正し、日本語も含めた一般的な時制論の構築を試みたが、その修正はまだ不完全なものであった。本稿ではこの談話構成原理をさらに一般

的な規定とする試みをおし進め、それによって日仏語の時制の仕組みの一端が体系的に記述しわけられることを示してみたい。

## 2. メンタルスペースによる時制論

### 2.1. 4つの基本スペース

まず、メンタルスペース理論による時制論の概略を紹介する<sup>1)</sup>。この時制論は4つの基本スペースの組み合わせで時制を記述する試みである。その4つは以下の通りである。ここでは、CUTRERのオリジナルではなく、井元(2010a)の定義を用いる。

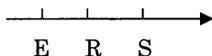
- (1) a. **BASE**: 話し手が言語活動を行っている想定されるスペース。「イマ、ココ」といったトークン再帰表現が第一義的に参照するスペース。
- b. **V-POINT**: 定形動詞が表すイベントが描かれたスペースに、直接テンス素性を与えるスペース。
- c. **FOCUS**: 話し手が定形動詞によって表現したい、表現意図の中心がおかれるスペースで、命題の真偽値の計算がなされるスペース。
- d. **EVENT**: 定形動詞が表しているイベントが置かれるスペース。

(井元 2010a, 25)

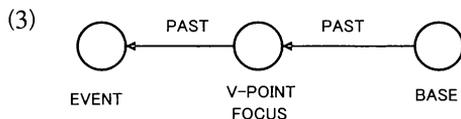
この図式では、基準となっているのがスペースであって、時間軸上の点でないということを除けば、発想としては古典的な REICHENBACH (1966) の時制論と同じだが、V-POINT が新たに付け加えられている。BASE, FOCUS, EVENT はそれぞれ REICHENBACH の point of speech (S), point of reference (R), point of the event (E) におおむね対応すると考えてもらえればよい。REICHENBACH は英語の過去完了形を以下のように示している。

- (2) 過去完了形

I had seen John.



これをメンタルスペースの図式で示すと以下ようになる。



---

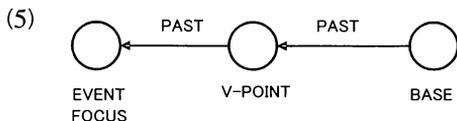
1) 詳しくは CUTRER (1994) および井元 (2010a) を参照。

ところが、以下の二つの文における過去完了形の価値は明らかに異なっている。

(4) a. He said that he *had* already *seen* John.

b. He said that he *had seen* John the previous day.

(4a) では I have already seen という現在完了形による発話を伝達したものであるのに対し、(4b) は I saw という過去形を伝達したものであるから、現在完了形と過去形の違いに対応する違いが、この過去完了形の中に内包されているはずである。REICHENBACH の図式ではこの違いを記述しわけることができないのに対し、メンタルスペースでは (4a) に対応するものとして (3) を、(4b) に対応するものとして



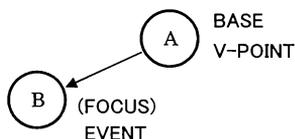
を示すことができる。(3) と (5) は FOCUS の違いであり、これは現在完了形と過去形の違いと同じであるので、(4) に現れた二つの過去完了形の違いを正しく記述しわけていると言えるだろう。

スペース構成の具体例をあげる。

(6) Paul a dit qu'il rendrait le livre dès qu'il l'aurait lu.

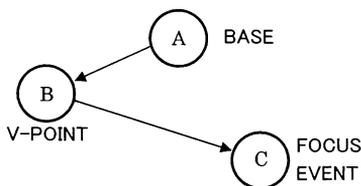
この文には a dit, rendrait, aurait lu, という 3 つの述定が含まれており、それぞれ複合過去形、条件法現在形、条件法過去形におかれている。それぞれの時制形態が対応するスペース構成を図示すると以下ようになる<sup>2)</sup>。

(7) a. 複合過去形

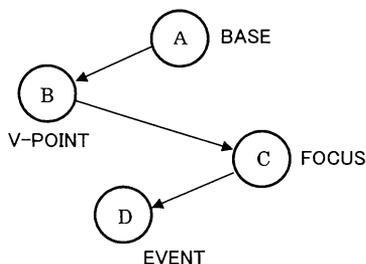


2) 図において、上下はスペースが作られていく順番を示し、上から下に向かって形成されていく。矢印は視点の向きである。左右はスペース相互の時間的前後関係を示す。左側に行けば、視点のあるスペースからみて時間的に前であることを示し、右側に行けば時間的に後であることを示す。

## b. 条件法現在形



## c. 条件法過去形



この記述からわかるのは、隣接したスペース間の前後関係が基本になっているということであり、AとCもしくはDとの前後関係は不明であるということである。さらに、一つ一つのアクセスパスはすべて形態と対応している。すなわち(7b)の条件法現在ではAからBのパスは *-ait* の半過去語尾に、またBからCのパスは未来形と共通な条件法現在形にある *-r-* 形態素に対応する。さらに(7c)の条件法過去では、AからCまでのパスは(7b)と同様であるが、CからDのパスが、*avoir+pp* という単語の組み合わせに対応しているのである。この(7c)の条件法の形も REICHENBACH の図式では記述できない。

### 2.2. 談話構成原理

ここまでは時制形態の価値をスペースを使って記述したにすぎないのだが、このスペース構成の移り変わりを談話の中でとらえようとしたところに CUTRER (1994) の新しさがある。(6)のような発話の中に現れた条件法現在や条件法過去を単純に(7b)や(7c)に対応づけるのではなく、*rendrait* のスペース構成は *a dit* のスペース構成に続くものとして、*aurait lu* のスペース構成はその前の *rendrait* のスペース構成に続くものとして捉えるのである。まず、最初の *a dit* の段階で、その複合過去という時制から(7a)のようなスペース構成が作られ、EVENT である B に *dire* というイベントが書き込まれる。次の *rendrait* はこのスペース構成から出発する。まず FOCUS である B に V-POINT が移動する、

次にそこから新しいスペース C が作られ、C に FOCUS と EVENT が移動し、(7b) の構成が得られるのである。次の *aurait lu* の場合もこの (7b) の状態から、新たなスペース D が作られ、そこに EVENT が移動して (7c) の構成になるのである。この (7a) から (7b)、さらに (7b) から (7c) のようなスペースの移動を規定するのが、「談話構成原理」である。

CUTRER (1994) の提案するオリジナルの原理は一般原理 (General Principles) と操作原理 (Operational Principles) とがあり、それぞれ以下のようになっている。

(8) General Principles

- a. At any given moment in the discourse interpretation process, there may be only one FOCUS space. The output of a single clause may have only one FOCUS space.
- b. There may be only one BASE in each hierarchical configuration of spaces, although more than one configuration and thus more than one BASE may be accessed for a single utterance.
- c. The BASE is the initial V-POINT. (CUTRER 1994, 77)

(9) Operational Principles:

- a. If FOCUS is BASE, V-POINT is also BASE.
- b. A new space is built from BASE or FOCUS.
- c. BASE may shift to any V-POINT, or to any previous BASE.
- d. FOCUS can shift to an EVENT space, to a BASE space, to a previous FOCUS space, or to a new space.
- e. V-POINT can shift to FOCUS or to BASE.
- f. EVENT can be FOCUS or it can shift to FOCUS or to a new space which is a daughter of V-POINT. (CUTRER 1994, 77)

一方、暗黙の了解として

- (10) 4つの基本スペースは、前の述定から次の述定に移る段階では、同じスペースにとどまっているか、談話構成原理に従った移動を行うかのどちらかである。

ということがある。(7a) から (7b) の移行では、BASE の位置は変わらず、V-POINT が (9e) に従って FOCUS に移動、新しいスペース C が (9b) に従って FOCUS である B から作られ、(9d) と (9f) に従って、そこに EVENT と FOCUS が移る。(7b) から (7c) への移行では、BASE、V-POINT、FOCUS の位置は変わらず、(9b) に従って新しいスペース D が作られ、(9f)

に従ってそこに EVENT が移る，ということになるはずである。従って (9f) の記述の最後は daughter of V-POINT ではなく，daughter of FOCUS の間違いであろうと思われる。そうでなくては (9b) との整合性がとれないし，(7c) のような EVENT の移動はできなくなる。

### 3. 日本語と談話構成原理

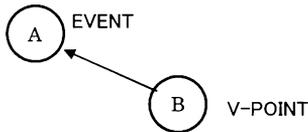
談話の流れの中で時制選択の可能性を探るという発想は，日本語の時制形態を眺めたときにその有効性が明らかになる。

(11) a. この本を読んだら時制の仕組みがわかったよ。

b. この本を読んだら時制の仕組みがわかるよ。

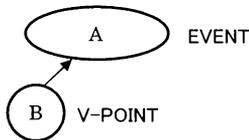
日本語は少なくとも現代語において終止形と連体形は同じ形態であり，従属節に置かれたル形・タ形は談話の流れに沿って，主節までたどり着かなくてはその価値は定まらない。(11a, b)における「読んだ」は全く同じ形態でありながら，(11a)では過去のイベントを，(11b)は未来のイベントを表している。しかしながら「読んだ」が担っているタ形の働きは(11a, b)で全く変わりはなく，「この本を読む」というイベントが，「時制の仕組みがわかる」というイベントに先行していることを示しているのである。ル形・タ形のスペース構成を(7)にならって図示すれば以下のようなになるだろう。いずれの場合も EVENT がまず構築され，時制形態素によって，V-POINT が設定されることになる。

(12) a. タ形



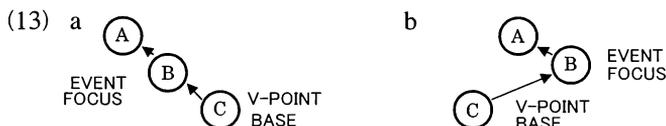
(EVENT を時間的に前とするような位置に V-POINT が設定される。)

b. ル形



(EVENT を時間的に同じか後とするような位置に V-POINT が設定される<sup>3)</sup>。)

日本語のル形・タ形はこのように BASE との位置関係については形態的には示されておらず、それで談話が完結するという談話的文脈によって定められるものと考えたい。(11a, b) では、どちらの場合も最初の述定「読んだ」の段階では、(12a) のような構成で、FOCUS も A に置かれたような形になっているが、タ形が B (=V-POINT) を A の右 (時間的には後) の位置に設定しているのである。次の述定「時制の仕組みがわかる」の EVENT と FOCUS はこの B の位置に移る。そして B からこの新しい述定の V-POINT となる C が、(11a) では (13a) のように右 (時間的には後) 方向に、(11b) では (13b) のように左 (時間的には前) 方向に設定され、ここが言い切りの形なので、C が BASE にもなる。



ここまで来て A は BASE からのアクセスパスをたどれるようになるのである。

こうしてみると、日本語では、V-POINT の位置が EVENT の後に定まり<sup>4)</sup>、新しい V-POINT の位置に EVENT が移動し、最後に V-POINT が移った場所が BASE になっているようである。つまり、英仏語と全く異なっているが、日本語には日本語の談話構成原理が存在し、それに従ってスペースが移動し、談話レベルでスペースの時制的価値が決まっている。日本語の時制形態素は形態のレベルでは BASE からの位置関係を示していないので、古典的な REICHENBACH (1966) の図式ではその価値を記述できない。しかしながら、隣接したスペースの位置関係を単位とするメンタルスペース式の記述は可能で、そのような共通の記述の上にとって初めて客観的な比較が可能になるとと思われる。

- 3) A の形が楕円となっているのは、EVENT が V-POINT と同時または時間的に後に位置づけられる、という両方の可能性があるため。
- 4) 日本語の定形動詞は「ル形/タ形」のいずれかの形で現れる以上、EVENT の出現時点で、V-POINT も同時に定まっているはずである、という反論が考えられるが、「私は本を読み、食事をして、出かけた」のように連用中止法で文を続けるような場合、EVENT が構築されて、その中に「本を読む、食事をする、出かける」という個々のイベントが書き込まれ、最後の「出かけた」の段階で、V-POINT が構築される、と考えられるので、EVENT が V-POINT に先行するとみなしている。

#### 4. 談話構成原理の修正

日本語の時制構成も考慮に入れた上で、改めて談話構成原理を再検討し、言語の普遍性と多様性に関する考察を深めてみたい。CUTRER (1994) のオリジナルの原理では (9f) において V-POINT と FOCUS を入れ替えなくてはならないように、英仏語に限ってみてもそれほど厳密なものとはいえない。また (8c) は英仏語を見る限り当然のような原理だが、日本語にはあてはまらず、日本語では逆に「BASE は最後の V-POINT である」というような原理が存在しているように思われる。BASE が最初であるか最後であるか、というのは一種のパラメータのような存在であって、筆者は当初、その違いによって (9b) を「新しいスペースの V-POINT は BASE もしくは次の FOCUS である」(井元 2010, 102), のように修正すれば日本語にも適応できると提案していたが、その後の考察からその種の単純な変形では適応できないと考えるに至った。本稿では、新たにより一般的な談話構成原理を提案したい。

##### 4.1. 一般原理

まず、理論の趣旨から、前提として (10) は日仏語に共通に認められなければならない。その上で (8a, b) を検討する。これはほぼ同じようなことを FOCUS と BASE について言っているのだが、表現は微妙に異なっている。どちらも一つ以上はない、という規定だが、FOCUS と BASE で単位が異なっており、FOCUS では single clause が単位であるのに対し、BASE は each hierarchical configuration である。しかしながらまず単一の定形動詞による述定の記述が基本であり、そこにおいては、BASE や FOCUS のみならず、V-POINT や EVENT についても、複数の異なったスペースに指定されることになっては時制価値の記述に役立たない。結局のところ (8a, b) は以下のような一般則としてまとめるべきである。

- (14) 4つの基本スペース (BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT) は、いずれのスペースも単一の述定において、2つ以上の異なったスペースに同時に指定されることはない。

これは、例えば (7a) のように、FOCUS と EVENT が同じ B に指定されることはあっても、B と C の両方が FOCUS とされることはない、ということである。これらの原理は英語やフランス語にみられるいくつかの現象の記述に役立つ。まず FOCUS に関して、CUTRER (1994) がしばしばあげるのは英語の現在完了である。

- (15) \*I have read this book yesterday. (CUTRER 1994, 209)

英語の現在完了は BASE, V-POINT, FOCUS が同一のスペースにあり、そこ

から過去のスペースに EVENT がある, という構成を表す. ところが, (15)は, このような現在完了を用いながら副詞 yesterday が FOCUS を指定し, それ  
が過去にあることを要求するので, 時制形式と副詞の間で齟齬がおこり非文  
になるとするものである.

フランス語の場合は単一 V-POINT 原則が記述に役立つ. 未来を表す迂言  
形式 aller +inf. の機能は次のように記述できる<sup>5)</sup>.

(16) A (V-POINT・FOCUS) から未来方向に B (EVENT) を設定する.  
ちょうど完了形と逆のパターンであり, EVENT が FOCUS より未来方向に  
あることに特徴がある. この図式そのものには BASE は非関与的であるが,  
フランス語の BASE は (8c) の規定があるので, A もしくは A の前の位置  
になくなくてはならない. A の前の位置にくる場合, BASE から A までの関係が  
何らかの時制によって表現されなくてはならないが, (16) は A に V-POINT  
が来ることを要求している. 従って, 単一 V-POINT の原則を守る限りその  
ような指定は半過去でしか行えないことになる. 実際この迂言形は現在形もし  
くは半過去形でしか表現できない.

- (17) a. il va pleuvoir.  
b. il allait pleuvoir.  
c. \*il ira pleuvoir.  
d. \*il irait pleuvoir.  
e. \*il est allé pleuvoir  
f. \*il était allé pleuvoir

(JEANJEAN 1988, 237)

このように (14) を規定しておけば (16) の記述で, (17) の現象が自動的に  
導かれることになるのである.

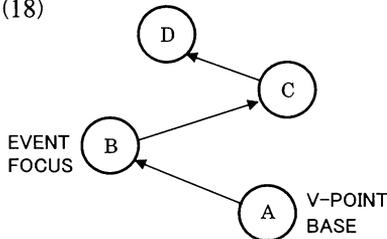
問題は次の (8c) である. 英語やフランス語の時制現象を観察する限り極  
めて自然な規定だが, 日本語のデータを見れば必ずしもそうではないことがわ  
かる. SOV の語順をもつ日本語では動詞の語尾によって時制が指定される前  
に, イベントを構成する内容はすべて語られている. おそらくはそのために,  
(12) で規定したように, EVENT のあとに V-POINT が定まるような構成  
になっているのではないと思われる. 実際 (6) に対応する日本語は「本は  
読んだら返すとポールは言った」であるから, 「読む」「返す」「言う」という  
EVENT はこの順に出てきており, フランス語とは全く逆である. (7) の書  
き方に準じて, それぞれのイベントが成立しているスペースを D, C, B そし

---

5) 詳しくは井元 (2010a) 参照.

て BASE を A とすると、「言った」と結ばれた段階におけるスペース構成は以下ようになる。

(18)



さらに、最終の言い切りの形になって初めて BASE が指定されるのであって、個々の述定では直後の V-POINT との関係のみが示されている。D の「読んだ」のタ形が示しているのは D に EVENT がおかれて、それが V-POINT である C からみて過去のある、ということだけであり、BASE からの位置関係は全く示されていない。D におかれたフランス語の *rendrait* が形態的に A からのアクセスパスを示しているのと対照的である。また次の「返す」の EVENT は前の「読んだ」の V-POINT の位置 C に置かれ、その時の V-POINT は B になる。さらに次の「言った」の EVENT はこの B の位置に置かれるので、日本語では V-POINT の位置に EVENT が移動する、というような談話構成原理の存在を示唆するのである。日本語では時制形態が表しているのは EVENT と V-POINT だけの極めて単純なスペース構成だけであり、FOCUS と BASE は談話の段階で付与されると考えられる。日本語の談話の流れは V-POINT が移動していき、その最後の移動先が談話的に BASE と認定されることになるのである。実際「読んだら返すと言ったと思う」などと別な要素が加わると、(18) の A までの構成は全く変わらず、そのさらに下に A を現在とする位置に V-POINT が移り、そこが BASE となる。こうしてみると BASE は日本語の場合、最初の V-POINT ではなく、最後の V-POINT なのである。従って (8c) は日本語を考慮に入れる限り

(19) BASE は最初もしくは最後の V-POINT である。

のように修正する必要がある。

#### 4.2. 操作原理

(9) の操作原理の方だが、(9a) を除くほとんどのものは英語やフランス語にしかな適用できない。これはあくまでも BASE → V-POINT → FOCUS → EVENT という流れを前提としたものであって、日本語は逆であるから全く

当てはまらない。ただ、個々の原理はそれぞれの基本スペースの動きを規定したもので、それぞれの基本スペースの定義や導入意図から、一般化が可能な部分が存在する。(9a)もBASE, V-POINT, FOCUSの定義から自動的に導かれる原理だが、同様にEVENTとFOCUSおよびV-POINTの関係もその設定意図から以下の原理として規定できる。

(20) a. FOCUSはEVENTと重なるか隣接してはいなくてはならない。

b. FOCUSはV-POINTと重なるか隣接してはいなくてはならない。

EVENTはもともと時制を受けるべき事行がおかれるスペースであるから、FOCUSも本来はここになくてはならない。FOCUSとEVENTがずれるのは、アスペクトの要素をスペース構成によって示そうとする意図によるものであって、この二つは一体となったセットとして捉えるべきものである。従って(20a)は汎用的な規定として通用する。このセットのうち、英仏語の動詞単純形の活用による時制形態素は常にFOCUSの位置指定の情報をそなえているため、FOCUSが優位に働くが、日本語は単に隣接したスペースとの関係しか示さないのがEVENTの方が優位である。しかしEVENTにしるFOCUSにしる、V-POINTはあくまでこのセットに対して直接テンス素性を与えるものである。すると少なくとも英仏語では(20b)は成立することになる。日本語ではFOCUSではなくEVENTがV-POINTとそのような関係になるが、ここでも日本語の形態素が隣接したスペースの関係しか示さないのが、(20a)と連動して(20b)が破られることはない。つまり(20b)も汎用性を持っているということになる。(20)はEVENTとV-POINTが隣接することは要求しておらず、(6)におけるaurait luの条件法過去のように、(7c)の構成をとり、FOCUSを中心にEVENTとV-POINTが別方向に隣接していればよいことになる。ただし、日本語ではそのような構成は存在せず、「読んだら」のタ形が構成しているのは(18)で示されるDとCの部分だけであって、DにEVENTとFOCUSが置かれ、CがV-POINTになる、ということだけが形態的に示されていて、V-POINTとEVENTは遊離していない。

### 4.3. 個別原理

おそらく汎用的な規定が可能なのは(9a)と(20)までであって、(9)で述べられたV-POINTやEVENTや新しいスペースに対する規定は、談話の流れに関するものであり、個別言語によって異なる部分であろうと筆者は認識している。英仏語では時制はBASEから始まり、BASEとFOCUSとの関係を基調とし、この関係が二つ重なることを許容するような構造になっている。V-POINTはBASE概念の拡張であり、V-POINTがFOCUSに移動できる、ということ

がこの複層性を保証しているものと言ってよい。(8c) と (9d, e, f) は英仏語個別の原理として以下のようにまとめられる。なお(9c)については今回は扱わない。

- (21) a. BASE は最初の V-POINT である。
- b. V-POINT は FOCUS に移動することができる。
- c. 新しい EVENT は BASE もしくは FOCUS から作られる。

これに対し日本語の個別原理は

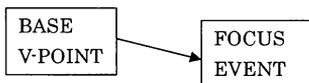
- (22) a. 最後の V-POINT は BASE である。
- b. V-POINT は EVENT の位置から形態の指示に従って移動できる。
- c. EVENT は V-POINT の位置に移動する。

のように記述できる。日本語では英仏語とは逆で、EVENT が出発点で、そこから V-POINT が移動するという関係が基調である。スペースの流れは V-POINT を追って EVENT がその位置に移動する、という関係で推移し、最後に V-POINT が移動した位置が BASE になるという構造である。また日本語の特徴として時制形態素は EVENT と V-POINT の位置しか指定せず、FOCUS と BASE は談話レベルで与えられるものである、という性質がある。

## 5. フランス語と日本語の時制構造

基本スペースを用いると、フランス語や日本語・英語の時制価値を図式的に記述しわけることが可能である。日本語のル形・タ形の時制価値は (12a, b) である。一方フランス語の単純時制は簡略化して表記すると以下ようになる。

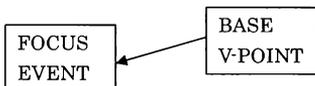
- (23) a. 現在形



(BASE・V-POINT から、時間的に同じか後の位置に FOCUS・EVENT を設定する.)

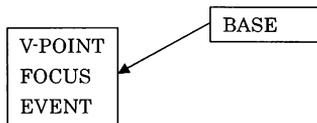
もしくは、4つのスペースがすべて同一スペースに指定される。

- b. 単純過去



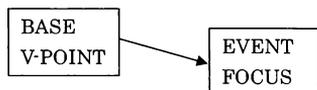
(BASE・V-POINT から、時間的に前の位置に EVENT・FOCUS を設定する.)

c. 半過去



(BASE から、時間的に前の位置に EVENT・FOCUS・V-POINT を設定する.)

d. 単純未来



(BASE・V-POINT から、時間的に後の位置に EVENT・FOCUS を設定する.)

このように V-POINT も含めてすべての基本スペースが形態的に指定されている。

複合形「助動詞＋過去分詞」は単純形に次の操作を加えることであると規定できる。

(24) EVENT の位置を時間的に前の位置に移動させる。

この規定と (20) の談話構成原理によって複合時制の価値は自動的に導くことができる。(24) の移動は (20) に抵触しない範囲で FOCUS の移動を伴うことができるが、それが可能なのは現在形の複合時制である複合過去と半過去形の複合時制である大過去に限られる。この二つはどちらも V-POINT に重なる位置と V-POINT に隣接した EVENT の位置の双方に FOCUS をおくことができるが、単純過去と単純未来の複合形である前過去と前未来では EVENT の位置に FOCUS が移動すると、V-POINT と FOCUS の位置が乖離してしまい、(20b) に抵触するからである。具体的な図式では大過去は (3) と (5) の二つの構成が可能なのに対し、前過去は

(25) EVENT ← FOCUS ← V-POINT・BASE

の構造のみが可能である、ということである。

筆者はこの種の定式化のみで、複合過去と単純過去の違いや大過去と前過去の違いが完全に明らかになると主張するつもりはない。だが、(25) に示されるような構造は前過去や前未来が *dès que* といった完了を強調する表現と親和性が高いこととも符合しており、その大まかな性質を図式的に示すことには

なっていると考えるのである。

## 6. 日本語と英仏語の異なり

メンタルスペースによる時制論は(17)に見られる aller+inf. のデータや複合時制の価値の表記など、フランス語の時制の体系的な記述にも役立つが、日本語のように全く構造を異にする言語の記述にも役立ち、対照言語学的に非常に有益な指標を与えてくれる。以下にその例をいくつか示す。

まず、日本語は BASE の位置が形態的に示されないというのが大きな特徴のひとつであるが、これがあるが故に REICHENBACH のような図式では日本語の時制形態素の価値を記述することができない。しかしながら隣接したスペースの関係にテンス素性を還元するメンタルスペースでは前節で見たように日本語とフランス語の時制形態素を、同じ形式を用いて記述対照が可能である。日本語のル形・タ形が BASE からの位置関係を必ずしも示さないということを考慮に入れるなら、フランス語にはない次のようなル形・タ形が存在することも理解できる。

(26) 財布を落とす。会社に遅れる。今朝はサンザンだった。

(尾上 2001, 370)

このル形は EVENT と V-POINT のみからなる素材を BASE とは無関係に単に提示したものである。

(27) さあ、買った、買った！

これも、同様に、完了済みである状態を目の前に単に提示し、その実現を希求する表現であり、BASE と無関係な時制形態素をもつ日本語ならではの表現であると言えよう。ただし、フランス語でも Qu'il entre. のような接続法がほぼ同じようなメカニズムで命令・希求表現になり得ている。

また(22)で示したような、EVENT から出発して V-POINT がそこから移動していくような日本語の構造から、日本語は登場人物など、EVENT の側にいる人物に視点をあわせやすいという特徴を導くことができる。

(28) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

(川端康成『雪国』)

b. The train came out of the long tunnel into the snow country.  
The earth lay white under the night sky. The train pulled up at  
a signal stop.

Seidensticker 訳

(28) は『雪国』の冒頭部分とその英訳だが、日本語が列車に乗っている人の視点で描かれているのに対し、英訳では列車の外側から描いたようになっている。

さらに、『源氏物語』の原文と René Sieffert による翻訳を詳細に比較した中山 (1984) によると、このように登場人物の視点で「誰々は～という気持ちになって～した」と読める原文が、「誰々は～という様子で～した」と外側から見た様子に移し替えられて訳出されている例が数多く見られるという。中山も指摘しているように、この訳し変えは、日本語とフランス語のもつ構造的な違いに由来するもので、日本語が作中人物の視点を取りやすいことを示す一例になる。

また日本語では、過去の描写の中にしばしば現在形が顔をだす。

(29) a. その日、鮎太が学校から帰って来ると、[...] 一人の少女の姿が眼に入った。少女と言っても鮎太よりずっと年長である。

(井上靖『あすなろ物語』)

b. En rentrant de l'école ce jour-là, Ayuta aperçut une petite fille [...] Elle n'était plus vraiment une petite fille d'ailleurs; elle était beaucoup plus âgée qu' Ayuta. G. Momber-Sieffert 訳

(30) a. Et sans attendre la permission de son hôte, d'Artagnan entra vivement dans la maison, et jeta un coup d'oeil rapide sur le lit. Le lit n'était pas défait. Bonacieux ne s'était pas couché.

(Alexandre Dumas, *Les Trois Mousquetaires*)

b. こういうと相手の返事も待たずにダルタニヤンは、つかつかと家の中にはいって、急いで寝台をちらりと見た。寝台の上はきちんと片づいている。ポナシュは、ここで寝なかったのだ。

江口清訳

(29) は日本語原文とその仏訳、(30) はフランス語原文とその和訳だが、いずれの場合も過去の描写が日本語ではル形で、フランス語では半過去形で書かれている。この場合も日本語は、(29) では鮎太、(30) ではダルタニヤンに沿うような視点で観察されている内容が記述されている。それらの視点をとるからこそ、直前の FOCUS と同じ位置に V-POINT が置かれ、そこが BASE となることに何の違和感も感じさせないのである。

フランス語でも「語りの現在 (présent de narration)」と呼ばれる過去を表す現在形の用法があるが、塩田 (2001) が話し言葉について観察しているように、それらは主として動的な動作の展開を表すものであり、日本語のように静的な状態を記述するものではない。筆者は SERBAT (1980) や MELLET (1980) のようにフランス語の現在形が無時間的な表現であるとは考えていない。過去を表す時間の副詞を後置させた \*Paul va à l'école hier. などが言え

ないことからフランス語の現在形の価値はあくまでも (23a) であって、語りの現在はあくまでも BASE が (9c) に従って前の FOCUS に移動した結果であって、この移動にはそれなりの環境的な条件が必要になってくると考える。その条件などの考察はここでは扱わないが、日本語に見られるように登場人物よりの視点に仮託させて BASE を移動させているわけではないであろう。

## 7. 結論

これまでの記述を通して、メンタルスペースを用いた時制論が、全く異なった体系を持つ日本語やフランス語の時制体系を同じ装置を用いて記述することを可能にし、両言語の構造の違いを明らかにする可能性を備えたものであることが理解されるであろう。こうした理論的背景をふまえ、日本語の過去を表す現在形とフランス語の語りの現在との違いなど、細かな文例の観察と分析などについては今後の課題としたい。

(大阪大学)

### [参考文献]

- CUTRER, M. (1994), *Time and tense in narrative and in everyday language*. Ph.D.thesis, University of California San Diego.
- 井元秀剛 (2010a) 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.
- 井元秀剛 (2010b) 「日仏言語における「現在」－V-POINT をめぐる対照研究－」『言語文化研究』36, 5-24.
- JEANJEAN, C. (1988), “Le futur simple et le futur périphrastique en français parlé, Etude distributionnelle”, BLANCHE-BENVENISTE, C.; CHERVEL, A.; GROSS, M. dir. *Grammaire et histoire de la grammaire : Hommage à la mémoire de Jean Stéfanini*, Publications de l'Université de Provence, 235-257.
- MELLET, S. (1980), “Le présent ‘historique’ et de ‘narration’”, *L'information grammaticale* 4, 6-11.
- 中山真彦 (1984) 「源氏物語仏訳の研究－物語構造試論 (その 1)」『東京工業大学人文論叢』10, 109-126.
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版.
- REICHENBACH, H. (1966), *Elements of symbolic logic* (c1947), Macmillan.
- SERBAT, G. (1980), “La place du présent de l'indicatif dans le système des temps”, *L'information grammaticale* 7, 36-39.

SERBAT, G. (1988), “Le prétendu < présent > de l’indicatif, une forme non déictique du verbe”, *L’information grammaticale* 38, 32-35.

塩田明子 (2001) 「話し言葉における présent de narration」『フランス語学研究』 35, 43-48.